

2023年(令和5年)

赤目まちづくり委員会・市民センター



1月号

赤目まちづくり通信

発行／赤目まちづくり委員会（赤目市民センター）〒518-0465名張市赤目町丈六238-1

E-mail: akame-ko@emachi-nabari.jp

TEL&FAX: 63-0329

新しい年を迎えて

赤目まちづくり委員会 会長 藤村純子
新玉の年のはじめをめでたくお祝い申し上げます。
昨年は赤目地域の皆様には、赤目まちづくり委員会の諸活動を始め赤目市民センターの生涯学習活動に対し心温まるご理解とご協力とあわせ種々のご指導を賜りコロナ禍の中ではありましたが、無事に諸事業を進めることが出来ましたこと改めて厚く御礼申し上げます。

さて令和4年を振り返ってみますと毎年恒例の一年を表す一文字が「戦」であったことは皆様もご承知の事と思います。そんな中ではありましたが、まちづくりや、市民センターでは色々と検討を重ね、感染対策を充分に取りながら進めて参りました事業目標達成のため協力いただきましたことに感謝いたします。とともに、赤目まちづくりのスローガン「みんなで考え みんなでつくる 夢はぐくむ わがまち赤目」を軸として、今後めづれる事なく進めていく覚悟でございます。

また、2年前より始めました「赤目竹あかりSDGsプロジェクト」は、体験から実践に向けみんなで頑張っています。年末12月3日から本年1月末日までの期間、赤目口駅のモニュメントから赤目四十八滝までの道中、夜間やわらかな竹あかりが道を照らしています。この光はこれからの赤目が進むべき道を照らすように、そして若者の未来をも照らす光となるよう輝いていると感じています。竹あかりプロジェクトでは、竹あかりだけでなく、竹の総合利用を目指し食品や装飾品等の商品開発を進め、その先には赤目の観光産業になっていく事を願っています。

迎えた令和5年は、兔年です。今までの暗いトンネルから明るい未来に向かって、ホップ・ステップ・ジャンプと飛躍していくことを願いますと共に、地域の皆様方のご健康、ご多幸をお祈念申し上げ年頭の挨拶とさせていただきます。

12月度の「赤目忍たま広場」を開催

今回は、12月でサンタさんのプレゼントもあり子供たちの笑顔があふれていました。楽しいひと時をありがとう。



錦生赤目小学校と交流

伊賀一ノ井松明講（森本芳文講長）が、「お水取り」で使う松明となるヒノキの植樹を実施。錦生赤目小学校の4、5年生計41人を招待。赤目地区老人クラブ協議会（姫野会長）が、お手製の「ぞうきん」を12月15日（木）小学校に贈呈。



近大高専の門松製作、遺族会が忠魂碑清掃

近大高専より門松の作り方を教えて欲しいと依頼があり、12月22日亀本相談役を中心に松の木・南天等の準備と近大高専正面玄関に飾り付けをしました。24日赤目地区遺族会代表で、雪の残る中朝早くから忠魂碑の清掃をして頂きました。



令和5年新年を迎えて

赤目市民センター センター長 吉田好文
新年あけましておめでとうございます。

皆様におかれましては、お健やかに新年をお迎えの事と謹んでお慶び申し上げます。日頃は、市民センターの運営、活動に対しまして温かいご支援、ご協力をいただき誠にありがとうございます。

さて、残念ながら昨年は一昨年に続いてのコロナ下であって、大きな催事や活動が中止、延期となりましたが、市民センターまつりにつきましては、これまた展示のみとなりましたが地域、ご関係の皆様方のご協力により開催させていただく事ができました。

上記の様な状況下であって、赤目まちづくり委員会・赤目市民センター及びサークルの皆さん方の会議や催し・活動等で市民センターをご利用された人は、6,600人（年間）余り、コロナ禍前は、16,300人でしたので、赤目のその「活動」は40%に縮小した事になります。

本年は、コロナの早期終息と多くの皆様方が従来通りご活動いただき、縮小した「活動」が少しでも取り戻せるように願うばかりでございます。

皆々様には、幸多き年でありますようにご祈念申し上げますと共に、なお、本年も引き続きご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

竹あかりロード点灯式

12月3日（土）17時より近鉄赤目口駅前から赤目四十八滝までの沿線道路沿いに竹あかり200個を設置。当日赤目口駅前、赤目竹あかりSDGsプロジェクト主催で、北川市長・西山教育長をお招きして、点灯式が行われました。赤目口駅の竹あかりは、名張高校美術専攻の学生さんが考案・設置。幽玄の竹あかり開催中の1月下旬まで点灯予定。



和風づくりの開催

12月4日（日）9時半より工芸室で、第3回「和風づくり」を開催。子供さんから高齢者まで、8組合計20名余りの参加を頂きました。少し苦勞をしながら和紙に竹ひごを貼り付け、糸目糸と反り糸を付け・足をつけて完成。最後に、大喜びで好きな絵柄を選んで貼り付けました。



コピーA4（白黒）5円、（カラー）10円。詳細は、市民センターまで。

皆様の情報をお寄せください。

いただいた情報は、取材を進めて、記事やWebサイトなどで紹介させていただきます。（内容は、リライト・一部加筆訂正致します。）

赤目まちづくり委員会
赤目市民センター

ホームページ



赤目まちづくり委員会・市民センターの情報がホームページでご覧いただけます。
※スマホ・携帯電話で左のQRコードを読み取って下さい。

子供も大人も、参加自由

赤目町の皆さまへ

赤目市民センター
センター長 吉田 好文

「くらしの中の人権」学習会のご案内



私たちの日常生活の中で、見落としてしまいそうな、何気ない出来事のなかにも人権が深く関わっています。
「暮らしと人権のかかわり」について下記の通り学習会を実施します。皆さまのご参加をお待ちしております。

- ・開催日 令和5年1月22日(日) 10時～11時20分
- ・場所 赤目市民センター 大会議室
- ・講師 名張市役所 地域環境部 人権教育主事 鴨志田 知子氏
- ・参加料 無料 (マスク着用でご参加願います。)

※定員30名になり次第締め切ります。令和5年1月16日(月)締め切り。

名張ケンコー！マイレージポイント対象です。

連絡先 赤目市民センター ☎63-0329

----- 切り取り線 -----

赤目市民センター「くらしの中の人権」学習会に参加を申し込みます。

ふりがな

名前／ (年齢 歳) 男 ・ 女

住所／

電話番号／ 携帯番号／

1月9日～2月5日までの予定

月	火	水	木	金	土	日
1/9	10	11 ふれあいサロン	12	13 赤目中学校 作品展(1/23日まで)	14	15
16	17 	18	19	20	21	22 人権学習会
23	24	25 忍たま広場 ふれあいサロン	26	27	28	29
30	31	2/1	2	3	4	5

<お知らせ>

※ふれあいサロンに令和4年12月より丈六区・南周子(みなみ ちかこ)さんが、お手伝いして頂ける事になりました。(地域活動部会・田中)
※一人暮らしの集いが中止となり、歳末訪問と共に粗品並びに星川区・姫野さんより頂いた瓢箪を配布させていただきました。

2・3月の行事予定

- ★2/8(水) ふれあいサロン
- ★2/10(金) 組紐づくり
- ★2/15(水) ELP 健康教室
- ★2/16(木) サンサンカレー
- ★2/22(水) 忍たま広場・ふれあいサロン
- ★2/26(日) ふるさとウォーク in あかめ
- ★3/8(水) ふれあいサロン
- ★3/22(水) 忍たま広場・ふれあいサロン



※赤目市民センターでは、コロナ対策として、検温・マスク着用・消毒・換気、名簿の作成など、3密(密集・密接・密閉)を避けて運営しています。
しかしながら状況に応じ、中止・延期になる場合が有りますので、ご注意お願い致します。

Vol.36 新・歴史散策紀行…「伊賀・赤目文化遺産」(各区・地域の名所・名品を募集しています。)

徒然草の生まれた種生(たなお)

赤目の昔話は、少しお休みを頂いて、好評で要望の多い伊賀にゆかりある人や史実の歴史散策を。

まずは、「つれづれなるまゝに、日くらし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書き付くれば、あやうこそ物狂ほしけれ。(原文)」で知られる『徒然草(つれづれぐさ)』は、旧青山町で書かれ、『つれづれ種(ぐさ)』と名付けられた鎌倉時代末期の随筆集で、『枕草子』『方丈記』と並ぶ日本三大随筆のひとつ。

作者は、吉田兼好(よしだけんこう1283年(弘安6年)～1352年(文和元年))・兼好法師(けんこうほうし)の名で知られるト部兼好(うらべかねよし)で、先祖が京都の吉田神社・神主の家で、後世、吉田兼好と言う。彼が48歳頃に、それまで書きためていた244もの散文をひとつにまとめたと考えられる。

その内容は、無常、求道、自然観、住環境、趣味、人間観察、人生訓、考証、逸話、滑稽談など多岐にわたり、見聞した同時代の話や書物から知り、聞いた故実や有職などを綴ったもので、鎌倉末期の社会の動きを知る歴史史料としても一級品。

この徒然草は、晩年に伊賀市種生国見の庵で書かれたとされる。国見山は、当時国見寺(草葺寺)があり、その一室で兼好法師が徒然草の草稿を練り、また近くの庵で晩年を過ごしたとされる。兼好法師終焉の地として「兼好法師遺跡公園」内に地元の人々が誇りとする兼好塚がある。遺跡地は東西20m、南北30mの平坦な雑木林で、高さ

1.2mの遺跡碑が中央に建てられていて、碑の前に土石がすこし高く積み上げられ、これが兼好の塚と言われる。晩年をここで過ごし、そして生涯をとじたという伝承が土地の人に深く信じられています。

松尾芭蕉が敬愛していた兼好の晩年過ごした種生(たなお)国見山を弟子の服部土芳がその意思を継いで訪ね、あたり一面草むらで兼好の遺跡らしきものは何もなく、その情景を「月添いて 悲しさこぼる萩すすき」と詠んでいます。また傍には兼好の句「ありとだに ひとにしられて身の程や みそかにちかき 有明の月」の碑もある。

『花は盛りに』から始まる『徒然草』第137段には、「花は満開の時のみを、月は雲がない状態の時のみを見るものではない。降っている雨を見て思いを馳せる月や、今にも咲きそうな梢(こずえ・樹木の先の部分)、花が散ってしまったあとの庭などにこそ、しみじみとした趣深さがある」と記されており、彼の風流さがうかがえる。

また、達筆であったことでも知られ、当時から文化人として名高い人でした。しかし自分の才を誇ることはしませんでした。世捨て人としての暮らしの中で、名誉よりも自分の心が豊かであることがずっと大切であると気づいていた。そのためか、残した随筆集は死後しばらく埋もれていたが、250年以上もの時を経た江戸時代に大流行し、世に広まることに。さらに時を経た現代もなお、その生き方は多くの人の共感を呼び、兼好が著した『徒然草』は、人生訓として人々に親しまれています。



吉田兼好の自画像



兼好塚・草葺寺跡の案内板



兼好法師遺跡公園



兼好の塚



服部土芳の碑



兼好の歌碑拡大